新潮文庫

多情仏心

里見　弴著

新　潮　社

多情仏心

定価は帯またはカバーに表示してあります。

新潮文庫 草38

昭和四十三年十一月十五日 発行
昭和四十四年十一月十五日 二刷

著者 里見弴
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)(二六〇)一一一一
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

印刷・光邦印刷株式会社 製本・大進堂製本所
© Ton Satomi 1968 Printed in Japan

新潮文庫

多情仏心

里見弴著

新潮社版

1830

多情仏心

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

序詩

あさ

しらじらと明けはなれて行った。
涼しげに小鳥が唄いだした。
見渡す草原は朝露にうるおい、早起の花ども悉く振り仰いだ。
大枝小枝を張って、欅の老木は思いきり伸びをした。
まずその梢から、旭に照り映えたと見るまに、空は、深まさり、蒼みわたった。
勢よく、烏の群が出かけて行った。
陽の色と、朝の匂に染まった空気の、ごく微な流れが動いた。
窪地の古池だけがまだ眠りこけていた。鰭には揺れず、蛇にも過られず、翡翠も掠めず、落葉も浮べず、沼気さえもあぶく立たなかった。ただ寂として、もの皆の影を映していた。
そこに、緩い傾斜を、男の子が駈けおりて来た。赤い、はち切れそうな頬、円眼。
続いて女の子は、草露に、ちょいと裾をたくしあげ、あちこち拾って、ピョイピョイと跳ぶようにしておりて来た。

上の平地に立っている櫟は、もう根本まですっかり日射のなかにあった。それでも、坂を下り、池を渡って、対岸の土手の上までも、長い影を落すような斜光が、子供たちの立ちどまったところへ、末広がりの縞になって、真正面からさしていた。

男の子は、じっとその光の縞を見詰めた。池の面から立ち騰る水蒸気が、そこへはいると、ほのぼのと眺められた。

「あらあら、ぐちょ濡よ」

女の子は一目うすべりの色を見てそう云った。土竈、土釜、錫の鍋や皿、茶碗、どれもこれもせいぜい大きくてマッチ箱ほどしかない台所道具が、濡れとおって、褐ッちゃけたうすべりの上に散乱していた。なかには、草の葉を盛ったままの皿があった。葉は、ペンペンショに、黝ずみ凋れていた。

「だからあたし、うちに持って帰っとかなくっちゃ駄目だって云ったのよ」

「じゃ持って帰りゃいいのに……」

「だってほったらかしといても大丈夫だって云うんですもの」

「誰がさ。……僕ゃそんなこと云った覚えないよ」

「じゃ美代ちゃんだったかも知れないわ……」

「だっていいじゃないか。どうもなってやしないじゃないか」

やっと、光の縞から目をはなして、うすべりの方を振向くと、「ほら、一つだってなくなってやしまい？」

「なくなってやしないけど、これじゃ坐れやしないわ」

「いいよ、今しきに乾くよ。……だけど、僕ア今日ははいんないぜ」
「なアぜ」
「ままごとなんてつまんないや」
「あらア……」
「だってそうじアないか。ままごとなんて、男のすることじアないもの」
「意地悪根性ねえ」
「なにが意地悪だい」
「だって、昨日まで仲間にはいってて……」
「そいだって、いいじアないか……」
「ええ、いいわ」
「なアんだい。なにがいいんだい」
「だからいいことよ。今日はなんかほかのことして遊びましょう。ねえ？　そんならいいでしょう？」
「……うん……」
「清ちゃんみたいに、すぐそんなに本気になって怒るのいやだわ。ね？　仲よくしましょうね？」
陽がのぼるにつれて、空はいよいよ色を深め、樹々の若葉は光り輝き、寝坊な池水も、爽かな朝風の訪れに、漣の微笑を反して、もの皆の倒影を、だんだら縞に揺り動かした。つれ舞う蝶は、高く低く野花を掠めて、やがて見えなくなる……。
どこか遠くで鶏が鳴いた。

男の子は、なんとも云わずに、ふと女の子の眼を見た。女の子もじッと見返した。
どこか遠くで、もう一度鶏の声がした。
ただなんとなく、うら悲しいような心持になって来て、男の子は目を野末に放った。女の子は、膝の上に両袖を重ねて、淋しくそこへ蹲むと、錫の皿をとりあげて、凋れた草の葉を摘み捨てた。皿の中は濡れていた。
ほそぼそと吐息をついた。
「あめんぼうを掬おうか」
真面目くさった顔つきをして、男の子は池の面を見詰めていた。
「……え？……。いて？」
女の子は、強いて快活に、立ちあがると、すぐ男の子と肩を並べて、「でも、なんか掬うものがなくっちゃア……」
細い足のさきにちょっと水を窪ませて、スウイスウイと居どころを変える小虫が、ひとしお少年の心を淋しくしていた。
「……うん……」
今度は、意識的に向き直って、丁度同じ丈恰好の女の子を、正面に見た。
「……？」
小首をかしげて、娘の子もじッと見返したが、瞳と瞳とがきノちりあって、一二秒もすぎないうちに、男の子は、ほとんど渋面をつくって、
「もう帰ろうか」

「……ええ……」

と、微に、うち頸垂れて答え、暫くしてから、「……なんか怒ってるの？」

「ううん、なんにも怒ってなんぞいやアしないさ。だけど、……ごめんね……！」

「あら！　なぜあやまるの」

「僕、意地悪いってごめんよ」

「まアいやだ。清ちゃん、ちっとも意地悪なんぞ云やアしないわ。それよか、あたしこそごめんなさいね……」

もう一度、瞳がピタリとあった。いつどちらから寄ったともなく、二人は、鼻と鼻とが触れ合うばかりに近く立っていた。

男の子は娘の、娘の子は少年の、瞳のすぐうらに、自分のとまったく同じ心を見た。もう羞かしさも何もなかった。相手と目を見合せているのではなくて、今はただ自分を見詰めているのだった。

——その自分は、泣きだしたいほど嬉しがってい、淋しくなるほど甘えてい、身ぶるいが出るほど真面目くさっていた……。

紺青の朝空も暗みわたり、欅の老木は葉をふるい枝を垂れ、池水は汐の如くひき、小鳥の唄も蝶の舞も消え行くよとばかり、世はここに、二人の小さな心の上に蹙り凝って、ただしんしんと耳のはたに鳴った。そして、これが、夢ではなかった。……時が飛び去り、時が飛び来った。

涙がおのずと溢れたと思う間もなく、お互の顔がぼやけて行って、睫につたわる水玉には、大空の光が映り輝き、硝子の破片から窺いたように、滅茶苦茶なものの影ばかりが、キラキラと揺

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

れ動いた……。

それで、少年が恥しいと思った。

くるりと背を向けて、手の甲で洟水を啜りあげると、そのまま少年は土手を駈けあがった。風に切れて、涙が揉上の方へ飛んだ。あがりきったところで、駈けながら振り返って見た。池を背に、女の子が、ぽかんとこっちを見上げていた。いつの間に出たのか、真ノ白な雲が一つ、くッきり水の面に浮んでいた。ちょっと立停まろうとして、よして、そこからは、わざと二三歩おきに跳びあがるような駈け方をして、榛の木の林の方へ行った。もとよりそこに、なんにも彼を待っているものがあったわけではない……。

後姿が見えなくなると、急に女の子は悲しくなって来た。ひとり置いて行かれたとか、こっちを振り向いて顔を見合せながら、立停りもしずに行って了ったとか、そんなことで悲しくなったわけではなかった。それどころか、男の子の心持が、――草土手を駈けあがって行く時の心持が、すっかり自分の胸へも映って来て、うれしくって、……嬉しいからこそ悲しいのだった。

母親の乳よりも甘い涙が、止めどもなく、あとからあとからと流れて来た。ペタンと草の上に坐って、袂を顔にあてた。草や湿った土の匂が清々しく鼻の穴へしみ込んで来た。

いやよいやよいやよ、清ちゃんいや、いやいやいや！　どこからともなく、そう云う言葉が浮んで来て、ただもうかぶりを振っていたかった。隈もなく満ち足りた心が、何故か、「いや！」と云う言葉を叫び続け、何かもっと辛いことを欲した。そして、悲しそうな涙が止めどなく溢れた……。

泣けるだけ泣いたあとは、心持が急にカランとして、軽く面白くなった。すぐ男の子のそばへ

行こうと思った。そんなに遠くへ行って了わないことは、よく解っていた。それでも、目のふちが赤く泣き腫れていはしまいかと思うと、きまりが悪くなった。袖口で、抑えつけるように、もう一度よく目のまわりを拭いてから立ちあがって、ひょいと上の方を見ると、男の子の頭だけが、土手の上へ出ていた。

「いやア」

思わず大きな声をだして、うしろ向に、草の上に突伏したが、すぐまた身を起すと、両袖に顔を隠したまま、「ひどいわ、そんなとこから黙ってみてるなんて……」

と云う声に、けれども、喜びが満ちていた。少年は、すぐ傾斜の頂きに跳んで出て、駈け下りようとした足を止めた。

「あのね、仙ちゃん、こっちいおいでな、いい花が沢山あるところを見つけたから」

「あらそう？　ほんとう？」

「嘘なんぞつきアしないよ。……早くさ、早くおいでったら……」

促し立てられるまでもなく、もう娘の子は、どんどん土手を駈けあがっていた。ほとんど鳥瞰的に見おろしていた少年の心は、軽く、明るくそして愉快だった。草深いところへかかって、歩き憎そうに、それでも一刻も早くと、肩を揺って大股にあがって来る、——自分ならばひとっ跳びだ、と思えば、ひとりでに微笑さえ浮んだ。

あがりきった女の子が、その微笑している少年と顔を見合せると、すぐこれも微笑って目をそらした。

「おお苦しい」

真ッ赤になって、ハアハア息をきらしていた。男の子は、迎えよって、手をとると、いきなり一散走りに駈けだした。首がうしろへガクンとなるほどに、腕が抜けるほどに、力一杯引ッ張られて、女の子も夢中で駈けた、二人の足は、夏草よりも、むしろ宙を踏んで……。

よる

蒼暗い空に、凍てついた星の数はたんとてもなかった。

風は凪ぎ、大気は冷えきって、轍のあとをそのままに、往来が石になっていた。

高く低く空を劃った屋根の下に、家々は大方もう戸を鎖して、薬屋、唐物屋の飾窓、蕎麦屋の腰高障子、小さな煙草屋の、うちから金巾の幕を引いた硝子戸、自動車屋の車置場、――幅をもった火影とては、そうした店の前にしか流れ出していなかった。湿気の涸れ果てた空気には、軒燈や看板の照明はにじみもしずに、ポンポンにもなく続いた。

両輪はずして立てかけてある手車のそばから、のそりと起きあがった犬が、用ありげに、電車通りの方へ出かけて行った。そっちの空には、カアンカアンと、金槌の音が響いていた。

釣鐘マントと、鼻のさきまで肩掛を巻きつけた束髪と、二人の姿が一つに塊って、五六軒しもた屋の並んだ薄暗がりから、銭湯の、高山の景色を描いた看板を照す五十燭ばかりの灯の下に現われて来た。首をすくめ、前こごみになって、小刻みに、薩摩下駄と薄歯の足音が揃っていた。束髪の頂きが、丁度、深くかぶった鳥打帽で、いくらか押しひしゃげられた耳と、すれすれの高さだった。

角を一つ曲ると、支那蕎麦の屋台がズルリズルリ動いて来た。ほんの心もち二人の肩が離れ

て、すれ違うと、脂ッこい肌からでも立ち騰ったような湯気に、生温かく二人の頬が舐められた。

「クフン」

息で鼻の穴を清めてから、「臭いな」

「ええ、ほんとね……」

それきりで、二人はまた前の沈黙に返った。往来は、だんだん淋しい屋敷町になって行って、薄歯の音が冴え、響きわたった。

「だけど……」

五六歩も歩いて、まだ男はそのさきを云い出さなかった。

「だけど、なアに？」

「やっぱり僕、送って行くだけにしようよ」

「あら、なアぜ？」

「悪いもの」

「あら、ちっとも悪くなんぞありゃアしないわ」

「だって、今時分から行って、寝床やなんか、……小母さんに悪いや」

「ちっともそんな心配いらないわよ。うちじア、しょッちゅうお泊りのお客があるから、いつだって二階の押入にちゃアんと用意がしてあるんですもの」

「だけどね、なんだか……」

またそれきり黙って了ったので、娘は顔を窺き込むようにして、

「どうしたの？　そんなこと云ったって、第一今時分から帰れやしないわ」
「帰れるさ。まだひょっとすれア赤電車に間に合うかも知れないし、なけれア俥を探すよ。俥もなけれア歩いたって知れたもんだ」
「あら、歩いちア大変だわ。そんなこと云わないで、泊っていらっしゃいよ。帰ったらすぐに電話てうちへそう云っとけばいいんじアないの」
「だって、隣の電話だからね」
「構やアしないわ。まだやっと一時かそこらてしょう。あたしなんぞいつだってほんとに眠るのは二時三時よ」
「それアね、電話なんぞ明日の朝だって構やアしないんだけれどもね……」
「じアなにがいけないのよウ」
娘の声音は、いかにもじれったそうだった。
「だってさ……」
また云い渋っていたが、思い切ったように、あとが早口になって、「小母さん、へんに思やアしないかしら」
「へんとは……？」
「今ごろ二人ノきりで帰って来たりして……」
「だって、それア、あなたが門のとこからすぐに帰って了ったとしても、あたし阿母さんに話すわよ。今時分一人て帰って来たなんて云えば、それこそ叱られちまうわ。へんに思われるどころか、あなた親切だって、きっとお礼を云われるぐらいなもんよ。そんなこと、ちっともなんとも

ありゃアしないじアないの」
「お礼を云いながらだって、へんに思ってないとは限らないからね」
「じアいいわ、どうでも勝手になさい、さっき泊って行くって云っといて、男のくせに……」
「なんだい、送って来たり怒られたりしちア合わないや」
「怒ってやしないけど……」
「じア、いいよ、泊ってくよ」
「きっとね！」
肩の丸味で念を押してよこした。
「その代り、へんに思われたって知らないよ」
「ええ、いいわ、構やしないわ」
「よし！」
と云うと、青年は、マントの下から手を出して、娘の手を求めた。待っていたように、すぐ堅く握り合わされ、「きっとだね」「ええ」「うれしい」「あたしも嬉しい」——そんな風な言葉が掌と掌とで囁かれた。
手を握り合ったまま一二町行って、或る冠木門の前に立った。丸火屋の薄い光の下で、二人は、正面に目と目を見合せた。——すぐ、莞爾とほころびた唇の上に、怒ったような真面目な青年の顔が伏さった……。
突然、半鐘が鳴った。
無言で、意味深げな眴を取交すと、急いであけた耳門を、娘から先にはいって、一二間小砂利

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong